

パーソナルアシスタント町田通信

2008年2月発行

<第11回>タイトル：お気に入りの店

過去4回のコラムでは理屈っぽい話が続いたので、今回は…。

散歩の途中でよく立ち寄りお気に入りの店があります。老夫婦が営んでいる手作り豆腐の店で、スーパーマーケットに比べ少し値が張るのですが大豆の味がする美味しい豆腐を買うことができます。冷奴や湯豆腐、鍋ものなど、この店の豆腐を食べようになってから我が家の食卓に豆腐料理が並ぶ機会が増えました。ここで買った“おから”を使って“おからハンバーグ”に挑戦もしました。老夫婦は豆腐を買うと決まると何か“おまけ”を付けてくれます。油揚げ、厚揚げ、がんもどき等、これらも手作りの美味しさがあります。散歩に同行している介助者が変わることから老夫婦は複数の介助者がいることに気がついて「介助者は何人いるの?」、「7人です」、「7人か、そんなにないなー」なんて会話がなされ、厚揚げやがんもどきをたくさんもらったこともありました。

しかし、残念なことに、この豆腐屋さんは新年になって店を開くことなく閉店してしまいました。去年の大晦日に行った時には「7日頃には営業すると思うよ」と言っていたのですが…。正月が過ぎて店に行くと「しばらくの間休ませて頂きます」と張り紙がしてありました。その後店が開くのを待ちながら散歩のたびに店の前を通っていると「機械老朽化のため閉店させて頂きます」に張り紙が変わっていました。

この豆腐屋の常連を自負していた私にとって閉店はとても寂しい出来事です。そのため、老夫婦のどちらかが体を壊したのだろうか? 2人だけで豆腐屋を営むのは辛くなったのだろうか? 大豆や燃料の高騰で利益を得難くなったのだろうか? 機械が直せないほど壊れてしまったのだろうか? など、閉店の真意を憶測しています。しかし、老夫婦の閉店の決断を尊重し、その後の生活が幸せであって欲しいと願います。そしてまたいつか老夫婦に会えたら「お豆腐美味しかったです!」と言いたいと思います。